

日本語教育実習における異文化と関わる能力育成の 可能性と育成に必要な要素の検討

佐藤 綾

大邱韓医科大学校外国語学部

高木 裕子

実践女子大学人間社会学部

【 要旨 】

近年、日本語教師には「異文化」に関わる素養が必要であると考えられ、また、実際必要であるとの調査結果が出ている。しかしながら、日本語教員養成課程においては、未だ、その取り扱いが十分とは言えないように思われる。他方、養成課程においては、実習などで異文化と接する機会が少なからずある。このことから、その機会を活用し、日本語教師の異文化と関わって行く能力を、そこで効果的に付けさせることはできないかと考えた。最終的には、異文化と関わる能力を伸ばす実習を目指す、そのような実習には、どのようなことが必要であるのかということの検討が必要である。そこで、その第一段階として、本稿では、2008年9月に行われた、実習を含む国際交流プログラムにおいて、異文化やその周辺領域に対する認識にどのような変化が生じたかを調査によって見ること、及び、過去の実習プログラムとの比較を通し、異文化能力を伸ばす実習プログラムのあり方に必要な要素を考えた。

キーワード：日本語教員養成、異文化、日本語教育実習、海外実習、国内実習

1. はじめに

2000年3月に発表された「日本語教育のための教員養成について」（以下、「新カリキュラム」とする）の「日本語教員養成において必要とされる教育内容」は、「社会・文化・地域」「言語と社会」「言語と心理」「言語と教育」「言語」の5つの区分に分かれている。そのうち、4つの区分に、それぞれ「異文化接触」「異文化コミュニケーションと社会」「異文化理解と心理」「異文化間教育・コミュニケーション教育」という「異文化」に関連のある下位項目が現れている。このことから、新カリキュラムでは、日本語教師に異文化と関わって行くための素地を有することを求めていること、またそれは幅広いものであることが窺える。また、それを裏付けるように、海外における日本語教師に必要な実践能力を調査によって見た、佐藤・古内・片野（2009）では、海外において日本語を教える場合には、「異文化適応」が必要であることがわかっている。

これらのことから、日本語教師にとっては、「異文化」と関わるための能力は必要であり、重要

であると考えられる。しかしながら、これまでの日本語教員養成においては、授業で日本語を教えられるようにするための知識や技術を習得させることに主眼が置かれ、異文化と関わるための能力の習得には、あまり注意が向けられてこなかったように思われる。だが、見方を変えれば、養成課程には教育実習で日本語学習者という異文化に触れる機会がある。その機会をうまく活用して、日本語教師の異文化と関わる能力を伸ばすことはできないだろうか。

2. 先行研究

2-1. 異文化と関わる能力とは

では、異文化と関わる能力には、どのようなものがあるのだろうか。

近年、異文化と関わる能力として“intercultural competence¹⁾”と呼ばれる能力が、様々な分野で重要になってきているという (Deardorff: 2006; P.12)。日本では山岸ら (1992) が、「異文化間能力」というものを提唱しているが、これは、「文化的背景の異なる人々とのやりとりにかかわるさまざまな能力を包括的に捉えようとする概念である」という (山岸: 1995: P.212)。また、八代ら (1998) は異なる文化背景の人々とともに生活していくには、いかにして建設的な関係を築いていけるかを知るとともに、「異文化コミュニケーション能力」が必要だとしている (PP.13-14)。

さらに、山岸 (1995) は異文化環境下で成功する要因を見た研究を4つのグループに分類している。一つ目は、海外でうまくやっていたる特性を重視するもの²⁾、二つ目は、異文化間コミュニケーション能力が重要であるとするもの、三つ目は、異文化で問われる潜在的な能力をいくつかの能力に集約しそれらを統合する力としてみるもの³⁾であり、四つ目は、異文化で問われる能力を(1)より統合的であり、(2)コミュニケーション・スキルより深いレベルで捉えるべきであり、(3)特定の文化に対してではなく、「自文化と異なる文化」一般に対する対処の仕方を助ける能力と捉えるものである。

これらのことから異文化と関わる能力には、様々な見方や研究があり、用語も統一されていないことが窺えるが、日本語教育というものに立ち返って考えると、異文化に関する幅広い知識や能力が求められていることから、様々な能力を包括的に捉えようとする山岸ら (同上) の「異文化間能力」が近いのではないかと考えられる。ここで、「異文化間能力」に関して見てみると、このモデルでは、「カルチュラル・アウェアネス」「状況調整能力」「自己調整能力」「感受性」の4つの能力によって、統合的に異文化接触での資質を捉えている。

ところで、渡辺 (2002) は異文化接触について、「異文化接触と言うのは、自分や自分たちの深

¹⁾ 研究者によっては、“intercultural communicative competence”, “cross-cultural adaptation”, “multicultural competence” などと、呼び方も違い、また、その定義にも、様々な差異があるという (Deardorff: 2004)。

²⁾ 例えば、宮原 (2006) が「異文化間コミュニケーション・コンピテンス」として挙げている、観察力、共感性、判断留保力、柔軟性、忍耐力、対人関係能力、適正な自己理解など。

³⁾ 渡辺 (2002) は、「統合的關係調整能力」理論がこれに分類されるとしている (p.58)。

くにある前提あるいは枠組みが、時によってはその前提の前提が揺さぶられる経験である」(p.55)としている。その上で、山岸ら(1992)のモデルを、異文化接触の経験において、自分の前提、あるいは前提の前提にどの程度気づいているのか、その前提や前提の前提をかたくなに守ろうとしないで新しい異文化の状況にどの程度調整していけるのかが課題になることを表したものだとしている(渡辺:2002;pp 59-61)。上記の渡辺の言に従うとすれば、まずは、「自分の前提、あるいは前提の前提」に気づくこと、つまり、山岸ら(同上)のモデルで言えば、「カルチュラル・アウェアネス」というものが必要であり、その上で「状況調整能力」「自己調整能力」「感受性」を高めて、そこで初めて、異文化接触に関する資質が磨かれていくのではないかと考えられる。よって、本稿では、まず、「気づき」というレベルで、異文化と関わる能力について考えて行く。

ところで、ここでの「カルチュラル・アウェアネス」は「1. 自文化(自己)への理解」「2. 非自民族中心主義」「3. 外国文化への興味」から成り、「1. 自文化(自己)への理解」には、「自分の国の文化の理解」「自己概念」「セルフ・モニタリング」「自尊心」が含まれ、「2. 非自民族中心主義」には、「非自民族中心主義」「自民族中心主義により偏見を持たない」「相手国の現地人に対する尊敬」が、「3. 外国文化への興味」には、「相手国の文化の理解」「相手国民への興味」「相手国の文化に対する関心」「外国文化への興味」「地域社会への関心」「好奇心が強い」「現地人との協調性」が含まれる。本稿では、このカルチュラル・アウェアネスの考え方を元にして見て行くが、本稿では、上記の3つの分類に関して「1. 自文化・自己への理解」と対になるものとして、「相手文化・相手への理解」を考え、そこに「2. 非自民族中心主義」「3. 外国文化への興味」が含まれるものとする。

これまで述べて来たことをまとめると、本稿では、「気づき」というレベルで異文化と関わる能力を見て行くが、その際に、「自文化・自己への理解」と「相手文化・相手への理解」という視点を設けることとする。

2-2. 異文化と関わる能力の育成と日本語教員養成及び教育実習

古田ら(1996)は、異文化コミュニケーション研究の目的として、「異文化相互理解に対する積極的態度の養成と世界的展望を持つ人間観の確立」「異文化との接触に必要な適応力の養成」「学校や職場における教育の一部をなす実際の異文化コミュニケーション技能の養成」を挙げているが、これらの目的は日本語教員養成にも通ずるところがあると考えられ、そのような意味において、日本語教育には、異文化コミュニケーションという視点が必要なのではないかと考えられる。また、石井ら(2001)は、「異文化コミュニケーション研究は、一般コミュニケーション研究の応用形ないし発展形として把握されることが多い」(P.11)としていることから、異文化コミュニケーションの基礎には、コミュニケーションがあると考えられ、コミュニケーションに関しても見ておく必要があると考えられる。

このようなことから、異文化コミュニケーション及びコミュニケーションについても見ていくが、先に述べた「カルチュラル・アウェアネス」との関連で考えると、異文化コミュニケーション及びコミュニケーションに対する気づきに関しては、まず自分自身がどうであるのかという認

識を問うものになると考えられる。よって、本稿では、異文化コミュニケーション及びコミュニケーションへの気づきを「自文化・自己への理解」へ分類することとする。

ところで、異文化と関わる能力を身につけさせるためには、八代ら（1998）、渡辺（2002）などが様々な方法を提示しているが、古田ら（1996）には、6種類の基本的な異文化コミュニケーション訓練が提案されており、第一の方法は、「現地の文化に関する事実を講義、討論、写真、ビデオテープ、文献などによって参加者に知らせる」もので、第二の方法は、「行動様式の差から生じる誤解の原因を指摘し、現地文化の立場から説明する方法」であり、第三の方法は、「自文化の価値観や行動様式の特徴を指摘し、次に現地文化の特徴を知らせることにより、コミュニケーションにおける文化的相違の問題を理解させる」ものであるという。さらに、第四の方法は、「心理学的に十分検証された原理を異文化への適応問題に応用する」もので、第五の方法は、「経験学習である。実際の体験かシミュレーションの疑似体験によって、異文化の特徴を参加者に理解させる方法」で、第六の方法は、「現地文化の出身者か生活経験の豊富な人が参加者と行動をともにして、直接相互作用を行う」ものである。

日本語教育実習との関連ということを考えると、そこでは、実際に実習生自身が異文化に入っていくという経験もすれば、異なる文化を持った日本語学習者と接することもあり、そういった経験は、上記の異文化コミュニケーション訓練の第五、及び第六の方法に当てはまるのではないかと考えられる。このことから、日本語教育実習は異文化コミュニケーションの訓練になり、異文化と関わる能力の育成に役立てることができるのではないかと考えられる。

3. 本稿の目的

本稿では、2008年9月に行われた実習を含む国際交流プログラムで、異文化と関わる能力の、どのような部分への「気づき」に変化が生じたのかを、質問紙調査法を用いて見て行き、また、過去の実習プログラムと比較することを通して、実習プログラムにおける異文化と関わる能力の育成の可能性と育成に必要な要素に関して検討する。

4. プログラムの概要

ここでは、2008年9月に行ったプログラムとそれに先立って行った2007年3月のタイ日本語キャンプ、2008年3月の韓国視察についてその概要を述べ、その特徴を比較する。それぞれの特徴を比較したものが表1である。

1) 青年国際シンポジウム&フィールドスタディ in Japan 2008

2008年9月に行ったプログラムの正式名称は「青年国際シンポジウム&フィールドスタディ in Japan 2008」（以下、「国際シンポジウム」とする）であり、2008年9月10日から20日までの11日間、主に東京の国立青少年オリンピック記念センターにおいて合宿をしながら行われた。参加者

は、日本の実践女子大学の学生及び卒業生約 20 名と海外の大学生 15 名（中国 10 名、韓国 3 名、モンゴル 2 名）であった⁴。このプログラムは、シンポジウムとフィールドスタディのほかに、日本語の授業、プロジェクトワーク、ホームステイなどから成っていた。そこでの役割分担としては、日本人学生が、プログラムの日程調整から海外参加者の受け入れの準備、期間中の運営を行った。但し、そこでの各学生の関わり方は様々であった。一方、海外からの学生は、このプログラムにおいて、日本人学生によって準備された状況において、日本語学習の促進を図ったり、交流を行ったりした⁵。

2) タイ日本語キャンプ

タイ日本語キャンプ（以下、「タイキャンプ」とする）は、2007 年 3 月 17 日から 26 日までの 10 日間、タイのカオヤイ国立公園内の施設において合宿をしながら行われた。参加者は、実践女子大学の学生 12 名と、タイの小学校 5 年生から高校 2 年生までの日本語学習者約 40 名であった⁶。このキャンプの中では、日本語の授業、文化アクティビティ、全体集会などが行われた。ここでの役割分担としては、日本人学生もタイ人学生もタイや日本のスタッフが準備した環境の中で、それぞれの授業やアクティビティの準備もしくは実施、参加をしていた⁷。

3) 韓国視察

韓国視察は、2008 年 3 月 21 日から 30 日までの 10 日間、韓国の大邱韓医大学校において行われた。参加者は、実践女子大学の学生 7 名である。この視察は、上記の 2 つと違い、あえて特別な場を設けず、普段行われている授業に参加するという形態であった。この視察の中で、参加学生は、日本語の授業、文化交流、ディスカッションの計画、実施を行い、また、MT と呼ばれる学生同士の交流のための 2 泊 3 日の合宿にも参加し、ホームステイも行った。

⁴ 総括責任者 1 名、コーディネーター 1 名、中国、韓国の引率者各 1 名も本プログラムに関わった。

⁵ 詳細については、古内ら（2009）を参照。

⁶ 生徒や実習生をサポートするために、日本側は、スーパーバイザー 1 名、コーディネーター 2 名、アシスタント 2 名が参加、タイ側は、学校のスタッフが数十名参加した。

⁷ 詳細については、佐藤・高木（2008）を参照。

表1 各プログラムの特徴比較

		国際シンポジウム	タイキャンプ	韓国視察
概要	場所	日本国内	海外	
	期間	10日前後		
	プログラム形態	合宿形式の特別プログラム	合宿形式の特別プログラム	既存の授業に参加
	内容	日本語授業 プロジェクトワーク シンポジウム	日本語授業 文化アクティビ ティ	日本語授業 文化交流 ディスカッション
海外学生	属性	大学生	小・中・高校生	大学生
	日本語レベル	上級	初級	初級～上級
	国籍	中国 韓国 モンゴル	タイ	韓国
日本人学生	関与形態	全て企画・運営	与えられた環境内での参加	一部企画・運営
	実習経験	経験者と未経験者	未経験者のみ	経験者と未経験者
	海外学生との接触時間	担当の時間のみ	ほぼ24時間	ほぼ24時間

5. 調査について

5-1. 調査内容の選定

2-1. でも述べたように、異文化と関わる能力を身につけるにも、まずは、自己や自文化、相手や相手文化についての気づきが必要であると考えられた。そこで、自己・自文化と相手・相手文化というものに分けて、それらに対する気づきを見ることとした。

5-1-1. 自己・自文化に関する調査

自己・自文化については、国際シンポジウムは、海外の日本語学習者を自国に招き入れるという状況であったことから、自文化、つまり、日本文化への気づきというものは生じにくいのではないかと考えられたため、自己に対する気づきのみを見ることとした。

1) エゴグラム

自己への気づきを見るために、まずは、佐藤・高木(2008)で用いた「エゴグラム⁸」を用いることとした。それは、「エゴグラム」が、パーソナリティに関して客観的な情報収集・分析が可能

⁸ エゴグラムは、心理学理論の一つである交流分析で用いられている。この理論では、人の行動は観察可能なものであり、それを状態として捉えることができると考え、その状態のことを「自我状態」と呼んでいる。「自我状態」には、CP (Critical Parent: 批判的な親)、NP (Nurturing Parent: 保護的な親)、A (Adult: 大人)、FC (Free Child: 自由な子ども)、AC (Adapted Child: 順応した子ども)がある。それぞれの自我状態のエネルギーの多寡をグラフ化したものが「エゴグラム」である。

で、尚且つ、時の経過や状況による変化を見ることができるという性質があること、また、過去の実習プログラムにおいても、「エゴグラム」を実施していたため、比較が可能であることが理由として挙げられる。

「エゴグラム」の質問は全部で 50 項目から構成されており、それぞれの質問項目に、「はい (○)」「どちらともつかない (△)」「いいえ (×)」で答える形式となっており、得点化するに当たってそれぞれ、「2点」「1点」「0点」とした。

ところで、「エゴグラム」はパーソナリティを見ることはできるが、異文化と関わる能力やそれに対する気づきを見るには適していないため、新たに異文化に関する質問項目が必要となった。その際、2-2. でも述べたように、異文化コミュニケーションという視点が必要であるということ、また、その異文化コミュニケーションの土台には、コミュニケーションというものがあることから、それぞれについて見ておく必要があると考えた。

2) 異文化コミュニケーションとコミュニケーション

異文化コミュニケーションに関しては、西田 (1998) の異文化コミュニケーション能力の質問項目を用いた。この質問項目は本来、60 項目設定されているが、本調査の質問紙に、コミュニケーションや相手や相手の文化に関する質問項目も設けたため、60 項目は負担が大きいと見え、項目数を減らすこととした。減らす際の基準は、他の質問項目と重なる性質を持つか否か⁹で、その基準で考えた結果、18 項目が選定された (参考資料 1 参照)。

また、コミュニケーションに関しては、Wiemann (1977) の “Communicative Competence Scale” を用いた。これはコミュニケーション能力を測るもので、36 項目から成る。これについても、先程と同じ理由で、項目数を減らしたが、その際の基準は、質問文の意図が伝わりやすいかどうか¹⁰、また、プログラムの中での変化が望めるかどうか¹¹、であった。結果として、26 項目となった (参考資料 2 参照)。

上記の、異文化コミュニケーションとコミュニケーションについては、選定された質問項目に対し、「全くそう思わない」から「とてもそう思う」までの 5 段階評定を行い、それぞれ、1 点から 5 点に点数化した。

5-1-2. 相手や相手の文化に関する調査

相手や相手の文化に関しては、シンポジウムにおける海外からの参加者の国籍が中国、韓国、

⁹ 例えば、「人と話をするとき、私は場所や状況に注意を払う」「私は自分を表現する方法を相手によって調整することができる」という項目は、「異文化コミュニケーション」というよりは、普通の「コミュニケーション」に関わるものである。

¹⁰ 「私は会話の時の行動は、スムーズではない」「私は会話に注意を払う」などは、質問の意図が伝わりにくいと考えられる。

¹¹ 「私は権威がある人と話すのは怖くない」「人は私に相談に来ることがある」などは、プログラムの期間内での変化は望めないと考えられた。

モンゴルとなっていたため、特定の国に関する文化について尋ねるのは適当ではないと考えられた。また、日本からの参加者は、さほど外国人との接触経験が多くなかったために、相手や相手文化に関する多くの知識は持っていないであろうと考えられた。このようなことから、相手や相手文化について詳細に尋ねるよりは、ある程度、概要的なことを尋ねた方が良いと考えた。そこで、川田・伊藤（2007）が用いた、相手や相手の国に対するイメージを尋ねた 31 の質問項目を、本調査では使用することとした。ただし、この質問項目の中に、質問項目同士で類似するものがあつたということと、回答する際の負担を軽減するという理由から、質問項目を 22 項目とした。なお、これらの質問項目について、本調査では、「外国・外国人に対するイメージ」という名称をつけておく。

この調査に関しては、外国や外国人に対するイメージを一對の単語で表し、それに対して、どちらのイメージにより近いかを 1 から 5 で評価してもらった。例えば、「気が短い-気が長い」という一對の単語について、非常に気が短いと思えば「1」、やや気が短いと思えば「2」、やや気が長いと思えば「4」、非常に気が長いと思えば「5」と評価してもらった（参考資料 3 参照）。

5-1-3. その他の調査

また、自己や、相手及び相手文化の接点、つまり、両者が接触する場面である「国際交流」に関しても見ておく必要があると考え、「国際交流」に関する質問項目も JALEX プログラムの効果測定のための調査項目を参考に 12 項目設けた。この調査に関しても、「外国・外国人に対するイメージ」と同様に、国際交流に対するイメージを一對の単語で表し、それに対して、どちらのイメージに近いかを 1 から 5 までの数値に置き換えて評価してもらった（参考資料 4 参照）。

5-2. 調査内容の決定

以上述べてきたようなことを背景に、本調査では、①エゴグラム、②異文化コミュニケーション、③コミュニケーション能力、④外国・外国人に対するイメージ、⑤国際交流に対するイメージの 5 種類の調査カテゴリーを設定した。なお、②から⑤はいずれも、異文化や異文化接触に直接関わる調査票であるため、本稿では「異文化アンケート」と称する。

以下の表 2 は、各調査カテゴリーの位置づけと質問項目数をまとめたものである。

表 2 調査の位置づけと質問項目数

調査票名	調査カテゴリー名	分類	質問項目数
異文化 アンケート	エゴグラム	自己	50
	異文化コミュニケーション		18
	コミュニケーション能力		26
	外国・外国人に対するイメージ	相手・相手文化	22
	国際交流に対するイメージ	両者の接点	12

6. 調査

6-1. 調査の実施

エゴグラムに関しては、国際シンポジウム、タイキャンプ、韓国視察の三つのプログラムにおいて行い、異文化アンケートに関しては、国際シンポジウムにおいてのみ行った。いずれも、プログラム開始前と終了後の2回実施した。

以下の表3は、調査の実施日と回答者数である。

表3 各プログラムにおける調査の実施日と回答者数

		国際シンポジウム	タイキャンプ	韓国視察
エゴグラム	前	2008年9月10日	2007年2月25日	2008年3月21日
		17名	12名	7名
	後	2008年9月19日	2007年3月26日	2008年3月30日
		18名	11名	7名
異文化 アンケート	前	2008年9月10日		
		16名		
	後	2008年9月19日		
		18名		

6-2. 分析

6-2-1. 分析対象者

分析に当たっては、調査の前後で回答者数が異なっているため、前後2回とも回答してもらった者を分析対象とする。よって、エゴグラムは、国際シンポジウム16名、タイ日本語キャンプ12名、韓国視察7名が分析対象となり、異文化アンケートは国際シンポジウム参加者のうち16名が対象となる。

6-2-2. 分析方法

エゴグラム、異文化アンケートとも、プログラム開始前と終了後の各平均値を求め、前後の差を見るために、t検定を行った。また、高木・佐藤（2008）では、実習を経験した者と経験していない者では、プログラム前後の変化のあり方に違いが生じていたことがわかったため、本稿においても、実習経験者と未経験者に分けて、プログラム前後の差を見る。また、必要に応じて、プログラム前後の質問項目の平均値の差を見て行く。表4は、各プログラムにおける分析対象者を実習経験者と未経験者に分けて、その数を示したものである。

表4 各プログラムにおける分析対象者数

		国際シンポジウム	タイキャンプ	韓国視察
エゴグラム	実習経験者	10名	0	4名
	未経験者	6名	11名	3名
異文化アンケート	実習経験者	10名	0	0
	未経験者	6名	0	0

7. 結果と分析

7-1. エゴグラム

7-1-1. 結果と分析

エゴグラムについては、CP、NP、A、FC、ACの自我状態別に、各プログラムの開始前と終了後の平均値を求め、t検定を行った。前後でt検定を行った後のt値と有意水準を実習経験者と未経験者ごとにまとめたものが、表5である。

表5 エゴグラム t 検定結果

		国際シンポジウム	タイキャンプ	韓国視察
		N=6	N=0	N=3
実習経験者	CP	-0.5	—	-1
	NP	1.67 *	—	0
	A	-0.9	—	-0.71
	FC	-0.3	—	0
	AC	-0.6	—	1.62 *
実習未経験者		N=10	N=11	N=4
	CP	-1.1	-3.47 ***	-0.61
	NP	-0.8	-0.86	2.74 **
	A	-2.9 ***	-1.43 *	0
	FC	-0.3	4.13 ***	-2.01 **
AC	-0.6	3.45 ***	1.81 *	

*p<.10 **p<.05 ***p<.01

まずプログラム別に見てみると、国際シンポジウムの場合、経験者はNPにおいて10%水準で有意傾向が見られたのに対し、未経験者はAにおいて、1%水準で有意差が見られた。また、韓国視察に関しては、経験者が、ACにおいて、10%水準で有意傾向が見られたのに対し、未経験

者はNP、FCは5%水準で有意差が見られ、ACについては10%水準で有意傾向が見られた。このことから、実習経験者よりも未経験者のほうが、パーソナリティに関して影響が現れやすいことが窺える。また、それぞれのプログラムによって、変化する部分が違っていることも窺える。

次に、経験者よりも変化の見られた未経験者の結果について見てみると、国際シンポジウムは、Aにおいて1%水準で有意差が見られ、タイキャンプはCP、FC、ACに関しては1%水準で有意差が見られ、Aに関しても10%水準で有意傾向が見られた。また、韓国視察については、NPとFCにおいて5%水準で有意差が見られ、ACに似関しては10%水準で有意傾向が見られた。これらのことから、変化が見られた自我状態の数の多さから言えば、

国際シンポジウム < 韓国視察 < タイキャンプ

という順番で、影響が現れたということになるのではないだろうか。

7-1-2. エゴグラムに関する考察

実習経験者よりも未経験者の方が、パーソナリティへの影響が大きい傾向があるということについては、未経験者にとって全てが初めての経験であるということから、ある程度予測が付くことであるが、逆に、経験者に影響がさほど現れていないというのはなぜなのだろうか。理由としては、一度目の経験で得られたパーソナリティで、二度目以降もある程度通用したということが考えられる。通用したとすれば、さほど変える必要がないために、変わらなかったのではないだろうか。そのような意味では、一度目の実習での経験というものの持つ意味は大きいということが考えられ、最初の実習は、十分に内容等が検討される必要があるのではないだろうか。

次に、「国際シンポジウム<韓国視察<タイキャンプ」の順で影響が現れたということに関しては、理由として、まず考えられるのは、タイキャンプと韓国視察は海外において行われたものであるのに対し、国際シンポジウムは国内で行われたものであるということである。つまり、国内よりは海外で行う実習の方がパーソナリティに与える影響は大きいのではないだろうか。また、韓国視察よりもタイキャンプの方が変化が見られた理由としては、同じ海外における実習とは言っても、韓国は通常の授業への参加、タイキャンプはある目的のためにわざわざ作られたプログラムであったという形態の違いが考えられる。これらのことから、一口で「実習」とは言っても、その与える影響は、場所やそのあり方によって違ってくると考えられる。

7-2. 異文化アンケート

7-2-1. 異文化コミュニケーション

異文化コミュニケーションに関するアンケートでは、質問項目に対し、5段階評定を行ってもらったものを1点から5点に得点化し、平均値を算出した。その上で、国際シンポジウム開始前と終了後の差についてt検定を行った。その結果が、表6である。

表6 「異文化コミュニケーション」に関する t 検定結果

	開始前	終了後	t 値
実習経験者	3.08 (0.698)	3.05 (0.604)	0.4
実習未経験者	3.08 (0.693)	3.1 (1.045)	-0.14

() 内は標準偏差

この t 検定の結果を見る限り、実習の経験者にも未経験者にも、国際シンポジウムの前後で「異文化コミュニケーション」に関する変化はなかったと言える。

では、「異文化コミュニケーション」内のいずれの質問項目においても、変化はなかったのだろうか。そこで、実習経験者と未経験者で、国際シンポジウム前後の平均値で 0.5 以上の差が生じていた項目を中心に見た。それを表したものが表 7 である。

表7 「異文化コミュニケーション」の質問項目において前後で差が生じた項目

項目番号	質問項目	前 (A)	後 (B)	B-A
実習経験者	2 外国人と話をするとき、私はストレスを感じる	2.8	2.2	-0.6
	1 外国人と話をするとき、私はリラックスしている	3.5	4.3	0.8
実習未経験者	5 外国人と話をするとき、私はいらいらしない	3.7	4.5	0.8
	7 外国人と話をするとき、私は相手の行動を理解することができる	3.3	3.8	0.5
	9 外国人と話をするとき、私は相手の行動を説明することができる	3.0	4.0	1.0
	13 私は外国人を信用することができる	3.3	3.8	0.5
	6 外国人と話をするとき、私は心配事が多い。	2.8	2.3	-0.5
	10 外国人と話をするとき、私はどう行動したらいいか分からない	2.5	2.0	-0.5
	12 外国人と話をするとき、私は自信がない	3.2	2.7	-0.5
	16 私は外国人とは距離をもっている	3.0	2.0	-1.0

「異文化コミュニケーション」の質問項目に関して、国際シンポジウム前後で差があったのは、実習経験者では 1 項目、未経験者では 9 項目あった。差のあった項目数からは、実習未経験者の方に何らかの影響があったと考えられる。

実習未経験者にどのような変化が生じたのかを質問項目を基に見てみると、「1. 外国人と話をするとき、私はリラックスしている」「5. 外国人と話をするとき、私はいらいらしない」「7. 外国人と話をするとき、私は相手の行動を理解することができる」「9. 外国人と話をするとき、私は相手の行動を説明することができる」「13. 私は外国人を信用することができる」という項目がプログラム後に平均値が増えている、つまり、「そう思う」と評価するようになっている。それに対し、「6. 外国人と話をするとき、私は心配事が多い」「10. 外国人と話をするとき、私はどう行動したらいいか分からない」「12. 外国人と話をするとき、私は自信がない」「16. 私は外国人と

は距離をもっている」については、プログラム後に平均値が減っており、「そう思わない」と評価するようになっている。これらのことを総合して考えると、未経験者は、外国人と話をするとき、不安を感じる事が少なくなったということ、外国人との距離が縮んだということ、外国人のことを多少なりとも理解できるようになったということを感じていることが窺える。

7-2-2. コミュニケーション能力

コミュニケーション能力に関するアンケートでは、質問項目に対し、5段階評定を行ってもらったものを1点から5点に得点化し、平均値を算出した。その上で、プログラム開始前と終了後の差についてt検定を行った。その結果が表8である。

表8 「コミュニケーション能力」に関する t 検定結果

	開始前	終了後	t 値
実習経験者	3.13 (0.559)	3.04 (0.477)	1.48 *
実習未経験者	3.4 (0.622)	3.37 (0.637)	0.48

() 内は標準偏差 *p<.10

表8からは、「コミュニケーション能力」については、実習経験者では10%水準で有意傾向が見られたのに対し、未経験者には有意差が見られなかった。

次に、「コミュニケーション能力」の質問項目に関して、国際シンポジウム前後の平均値に0.5以上の差が見られた項目を表9に示す。

表9 「コミュニケーション能力」の質問項目において前後で差が生じた項目

項目番号	質問項目	前 (A)	後 (B)	B-A
実習経験者	7 私は他人の気持ちを無視する	1.6	2.2	0.6
	23 私は柔軟な人だ	2.7	3.2	0.5
	8 私はたいてい、他人がどのように感じるか分かる	3.3	2.7	-0.6
	14 私は変な要求を友達にあまりしない	3.3	2.7	-0.6
	21 私は知らない人と会う集まりを楽しむ	3.9	3.2	-0.7
実習未経験者	25 私は話をするとき、自分の声や身体を表現豊かに使うのが好きだ	3.6	4.2	0.6
	5 私は話を聞くのが上手だ	4.0	3.4	-0.6
	13 私は与えられた状況の中でどんな行動が適切かたいてい分かる	3.8	3.2	-0.6
24 私はたいてい、正しい時に正しいことを言う	3.4	2.8	-0.6	

この表から、実習経験者に関しては、「23. 私は柔軟な人だ」で評価が良くなっている以外は、「7. 私は他人の気持ちを無視する」「8. 私はたいてい、他人がどのように感じるか分かる」「14.

私は変な要求を友達にあまりしない」「21. 私は知らない人と会う集まりを楽しむ」に関しては、評価が悪化している。実習未経験者については、「25. 私は話をするとき、自分の声や身体を表現豊かに使うのが好きだ」で評価が良くなっている以外は、「5. 私は話を聞くのが上手だ」「13. 私は与えられた状況の中でどんな行動が適切かたいてい分かる」「24. 私はたいてい、正しい時に正しいことを言う」に関しては、評価が悪化している。

これらの結果からは、両者とも、プログラム開始前に自分で思っていたほどには実際のコミュニケーション能力がなかったということをプログラム終了後に認識している様子が窺える。

7-2-3. 外国・外国人に対するイメージ

「外国・外国人に対するイメージ」に関するアンケートでは、「気が強い⇔気が弱い」のような一対の語に対して、よりどちらのイメージに近いかを1から5に当てはめて評価してもらった上で、それを数値化し、平均値を算出した。その上で、プログラム開始前と終了後の差についてt検定を行った。その結果が表10である。

表10 「外国・外国人に対するイメージ」に関するt検定結果

	開始前	終了後	t値
実習経験者	2.61 (0.576)	2.39 (0.580)	2.97 ***
実習未経験者	2.43 (0.660)	2.22 (0.726)	1.72 **

()内は標準偏差 ***p<.01 **p<.05

この結果からは、実習経験者、実習未経験者とも「外国・外国人に対するイメージ」に変化が生じたことが分かる。

次に、「外国・外国人に対するイメージ」の質問項目に関して、国際シンポジウム前後の平均値に0.5以上の差が見られた項目を表11に示す。

表 11 「外国・外国人に対するイメージ」の質問項目において前後で差が生じた項目

	項目 番号	質問項目		前 (A)	後 (B)	B-A	
		1 ← ←	→ → 5				
実習 経験者	7	プライドが高い	⇔	プライドが低い	2.9	2.2	-0.7
	9	根性がある	⇔	根性がない	2.4	1.7	-0.7
	12	まじめだ	⇔	まじめではない	2.4	1.9	-0.5
	16	知的である	⇔	知的ではない	2.8	1.7	-1.1
	19	友好的である	⇔	友好的ではない	2.0	1.4	-0.6
実習 未経験者	10	うるさい	⇔	静か	2.2	3.2	1.0
	11	団結力がある	⇔	団結力がない	2.8	2.3	-0.5
	12	まじめだ	⇔	まじめではない	3.2	1.3	-1.8
	13	礼儀正しい	⇔	礼儀正しくない	3.0	1.7	-1.3
	14	親切	⇔	親切ではない	1.8	1.3	-0.5
	18	つきあやすい	⇔	つきあにくい	2.5	1.8	-0.7

この表から、実習経験者に関しては、「プライドが高い」と評価するようになったことを除けば、「根性がある」「まじめだ」「知的である」「友好的である」という評価が強化されていることから、外国や外国人に対するイメージというのは、概ね好転していると考えられる。また、実習未経験者についても、「10. うるさい⇔静か」を除けば、「団結力がある」「まじめだ」「礼儀正しい」「親切」「つきあやすい」と評価するようになっていることから、こちらも外国や外国人に対するイメージが良くなっていると考えられる。

7-2-4. 国際交流に対するイメージ

「国際交流に対するイメージ」に関するアンケートでは、「温かい⇔冷たい」のような一對の語に対して、よりどちらのイメージに近いかを1から5に当てはめて評価してもらった上で、それを数値化し、平均値を算出した。その上で、プログラム開始前と終了後の差についてt検定を行った。その結果が表12である。

表 12 「国際交流」に関する t 検定結果

	開始前	終了後	t 値
実習経験者	2.06 (0.663)	2.08 (0.591)	-0.26
実習未経験者	2.07 (0.657)	1.88 (0.488)	1.71 *

() 内は標準偏差 *p<.10

t 検定の結果、実習未経験者にのみ10%水準で、有意傾向が見られた。

次に、「国際交流に対するイメージ」の質問項目に関して、国際シンポジウム前後の平均値に0.5以上の差が見られた項目を表13に示す。

表 13 「国際交流に対するイメージ」の質問項目において前後で差が生じた項目

	項目 番号	質問項目			前 (A)	後 (B)	B-A
		1 ← ←	↔	→ → 5			
実習未経験者	1	親しみやすい	↔	親みにくい	2.0	1.5	-0.5
	2	個人的	↔	組織的	3.7	2.5	-1.2
	7	気軽な	↔	気軽ではない	2.5	2.0	-0.5

実習経験者については、前後で 0.5 以上の差が生じた項目はなかった。t 検定の結果も考え合わせると、量的にも質的にも、「国際交流に対するイメージ」については、変化がなかったことを表している。

一方で、未経験者については、3 項目に関して変化が見られ、国際交流が、「親しみやすい」「個人的」「気軽な」ものへとイメージが変化していることがわかった。このことは、未経験者にとって、国際交流というものが身近なものへと変化したことを表していると考えられる。

7-2-5. 異文化アンケートに関するまとめと考察

表 14 は、これまで述べて来た異文化アンケートの 4 種類の調査カテゴリーごとに、国際シンポジウム前後の平均値に関して t 検定を行った後の t 値と有意水準を実習経験者と未経験者別にまとめたものである。

表 14 異文化アンケート t 検定結果まとめ

調査カテゴリー名	分類	実習経験者	実習未経験者
異文化コミュニケーション	自己	0.4	-0.14
コミュニケーション能力		1.48 *	0.48
外国・外国人に対するイメージ	相手・相手文化	2.97 ***	1.72 **
国際交流に対するイメージ	両者の接点	-0.26	1.71*

***p<.01 **p<.05 *p<.10

5-2. において、それぞれの調査カテゴリーの位置づけを行った際に、「異文化コミュニケーション」と「コミュニケーション能力」は自己に関する調査であり、「外国・外国人に対するイメージ」は相手や相手文化に関するもの、「国際交流に対するイメージ」は両者の接点に関するものであるとした。そのことを踏まえて、t 検定の結果を見てみると、実習未経験者は、「国際交流に対するイメージ」や「外国・外国人に対するイメージ」という自己以外の調査カテゴリーに関しては、変化が見られたが、「コミュニケーション能力」や「異文化コミュニケーション」という、自己に関する調査に関しては、変化が見られなかった。一方で、実習経験者は、「国際交流」に関しては変化が見られなかったが、「外国・外国人に対するイメージ」「コミュニケーション能力」に変化が見られた。

これらのことから、実習経験の有無によって、プログラムの前後で変化する点が違ってくるこ

とが窺える。実習未経験者は、「国際交流」や「外国・外国人に対するイメージ」のような自分以外のことに関しては変化が生じやすいが、「異文化コミュニケーション」や「コミュニケーション能力」のような自分に関わることについては、さほどの気づきはないと考えられる。他方、実習経験者に関しては、何回か実習を経ることによって、「国際交流」に関してはイメージが定まったために、変化が見られなかったのではないだろうか。しかし、「外国・外国人に対するイメージ」が変化していたことから、対象となる学習者が実習ごとに違うことによって、その都度イメージが変わるのではないかと考えられる。さらに、「コミュニケーション能力」に関しては、未経験者と比べると、その経験の量が違っていることから、コミュニケーションについて考える視点や深さも当然違ってくると考えられる。そのようなことから、経験者にはプログラム前後で違いが生じていたのではないだろうか。

ところで、「異文化コミュニケーション」に関しては、実習経験者、未経験者とも変化が見られなかった。このことは、「異文化コミュニケーション」に関しては、実習経験の有無というよりは、むしろ、プログラムのあり方が影響を与えることを示しているのではないだろうか。つまり、今回の国際シンポジウムは、国内で実施されたため、自分が異文化に晒されるという状態ではなく、また、海外学生との付き合いも自分の授業の担当の時間などに限られていたことから、さほど密に異文化と接触するという状況ではなかったと考えられる。そのため、「異文化コミュニケーション」にはあまり影響が出なかったのではないだろうか。

8. まとめ —エゴグラムと異文化アンケートから—

本稿では、実習プログラムにおける、異文化と関わる能力の育成の可能性とその育成に必要な要素を見るために、調査を行うこととした。その際、2-1.でも述べたように、異文化と関わる能力を身につけるにも、まずは、自己や自文化、相手や相手文化についての気づきが必要であると考えられた。そこで、その気づきについて見るために、「エゴグラム」「異文化コミュニケーション」「コミュニケーション能力」「外国・外国人に対するイメージ」「国際交流に対するイメージ」の5つの視点からプログラムの前後に変化があったか否かを見てきた。

その結果、エゴグラムからは、どのような実習であっても、パーソナリティが全く変わらないということはないということが分かったことから、実習というのは、それだけで自己に対する気づきが生じると考えられる。しかし、実習が初めての者への影響の大きさを考えた場合には、海外で行うこと、合宿のような集中した形で行うことといった要素を組み込むと、より効果的なのではないかと考えられた。

また、「コミュニケーション能力」「外国・外国人に対するイメージ」「国際交流」に関しては、実習経験の有無によって多少差が出るが、国内で実習を行っても、接触時間がさほど多くなくても、ある程度変化があるということがわかった。一方で、実習経験者と未経験者で、変化があったものに違いが生じていたことから、異文化に関わるものへの気づきもしくは認識にも発達段階のようなものがあり、一度で全てを変化させることは難しいということが窺えたことから、何度

か実習を経験する必要があるということが考えられた。

最後に、「異文化コミュニケーション」に関しては、実習経験者であっても未経験者であっても変化が見られなかったことから、自国内にいただけでは、変化させることは難しいと考えられ、その解決方法としては、自分自身が海外に赴くことや、異文化トレーニングのようなものを取り入れた実習を行うなど、何らかの策を講じる必要があることが窺われた。

日本語教育実習において、異文化と関わる能力を伸ばすことができるか否かと言えば、今回の結果を見る限りでは、「できる」と考えられる。しかしながら、その効果を考えた場合には、実習をどこで行うか、どのような形態で行うか、何回行うかなど、実習のあり方を検討する必要性がやはりあるのではないかと考えられる。

9. 最後に

今回の結果は、実習3回分のエゴグラムと、実習1回分の異文化アンケートを見たものであるため、これで確たることは言えないが、これまで日本語教育であまり触れられることのなかった異文化と関わる能力に関して、実習においてどのようなことができるのか、また、できないのかを見たことには意味があると考えられる。今後も、実習生のデータを積み重ねて行くことで、実習と異文化と関わる能力の関係を明らかにして行ければと思う。

参考文献

- 石井敏・久米昭元・遠山淳（2001）『異文化コミュニケーションの理論』、有斐閣
- 川田寿枝子・伊藤令枝（2007）「日韓文化交流の諸相と実証的研究」『韓国における日本語教育』（櫻坂英子編著）、pp.89-114 三元社
- 佐藤綾・高木裕子（2008）「日本語教育実習の一形態としての『日本語キャンプ』の実施と検証」『実践女子大学人間社会学部紀要』第4集、pp.39-64
- 佐藤綾・古内綾子・片野洋平（2009）「日本語教師の実践能力に関する国際調査」『平成18年度-20年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書 「求められる日本語教員に日本語教員養成課程はどう答えるか」に関する研究』（印刷中）
- 新里里春・水野正憲・桂戴作・杉田峰康（1986）『交流分析とエゴグラム』、チーム医療
- 高木裕子・佐藤綾（2008）『『適応的熟達家としての日本語教師』育成と授業研究に基づく実践化過程での諸問題』『2008年度日本語教育学会秋季大会予稿集』、pp.179-180 日本語教育学会
- 西田司（1998）『異文化の人間関係』、多賀出版
- 日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議（2000）『日本語教育のための教員養成について』、文化庁
- 古内綾子・高木裕子・佐藤綾・神谷慶美・宮林千尋（2009）「学生主体型青年国際シンポジウムの実施と評価」『実践女子大学人間社会学部紀要』第5集（印刷中）
- 古田暁・石井敏・岡部朗一・久米昭元（1996）『改訂版異文化コミュニケーション』、有斐閣
- 宮原哲（2006）『新版入門コミュニケーション論』、松柏社
- 八代京子・小池浩子・町恵理子・磯貝友子（1998）『異文化トレーニング』、三修社
- 山岸みどり（1995）「異文化間能力とその育成」『異文化接触の心理学』（渡辺文夫編著）、pp.209-223 川島書店
- 山岸みどり・井下理・渡辺文夫（1992）「『異文化間能力』測定の試み」『現代のエスプリ』299、pp.201-214 至文堂
- 渡辺文夫（2002）『セレクション社会心理学 22 異文化と関わる心理学』、サイエンス社
- Deardorff, K. D (2004). The Identification and Assessment of Intercultural Competence as a Student Outcome of Internationalization at Institutions of Higher Education in the United States. Unpublished dissertation, North Carolina State University, Raleigh, NC.
- Deardorff, K. D (2006). Policy Paper on Intercultural Competence. Intercultural Competence-The Key competence in the 21st century? pp.12-34. <http://www.bertelsmann-stiftung.de>.
- Wiemann, J. M. (1977). Explication and test of a model of communicative competence. *Human Communication Research* 3 195-213.

【 参考資料 1 】「異文化コミュニケーション」に関する質問項目（一部抜粋）

《異文化コミュニケーションについて、あなたの意見に一番近い数字に○をつけてください。》

- | | | | | | |
|----------------------------|--------------|---------------|---------------|-------------|-------------|
| | 全くそう
思わない | あまりそう
思わない | どちらとも
いえない | すこし
そう思う | とても
そう思う |
| 1. 外国人と話をするとき、私はリラックスしている。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 2. 外国人と話をするとき、私はストレスを感じる。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 3. 外国人と話をするとき、私は落ち着いている。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 4. 外国人と話をするとき、私は不安を感じる。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 5. 外国人と話をするとき、私はいらいらしない。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

【 参考資料 2 】「コミュニケーション能力」に関する質問項目（一部抜粋）

《自分のコミュニケーション能力について、どのように思いますか。》

一番近い数字に○をつけてください。》

- | | | | | | |
|------------------------|--------------|---------------|---------------|-------------|-------------|
| | 全くそう
思わない | あまりそう
思わない | どちらとも
いえない | すこし
そう思う | とても
そう思う |
| 1. 私は話しやすい人だ。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 2. 私は状況の変化に合わせてことができる。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 3. 私はよく他人の話をさえぎる。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 4. 私と話をするのは価値があることだ。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 5. 私は話を聞くのが上手だ。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

【 参考資料 3 】「外国や外国人に対するイメージ」に関する質問項目（一部抜粋）

《外国や外国人について、どのようなイメージを持っていますか。》

下のことばについて、あなたのイメージに一番近い数字に○をつけてください。》

- | | | | | | |
|-----------|-----|----|----|-----|-------------|
| | 非常に | やや | やや | 非常に | |
| 1. 気が強い | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 気が弱い |
| 2. 愛国心がある | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 愛国心がない |
| 3. 気性が荒い | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 気性が穏やかである |
| 4. 感情的である | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 理性的である |
| 5. 競争心が強い | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 競争心が弱い |

【 参考資料 4 】「国際交流」に関する質問項目（一部抜粋）

《「国際交流」について、どのようなイメージを持っていますか。》

下のことばについて、あなたのイメージに一番近い数字に○をつけてください。》

- | | | | | | |
|-----------|-----|----|----|-----|----------|
| | 非常に | やや | やや | 非常に | |
| 1. 親しみやすい | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 親しみにくい |
| 2. 個人的 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 組織的 |
| 3. 温かい | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 冷たい |
| 4. 望ましい | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 望ましくない |
| 5. 身近な | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 身近ではない |